

光村図書ウェブコンテンツのご案内 「生徒作品ギャラリー ART BY STUDENTS」

ウェブサイト上で、全国の中学校・高等学校の生徒作品をご覧いただけるコンテンツ「生徒作品ギャラリー ART BY STUDENTS」を公開しています。

さまざまな作品約1000点(2022年10月現在)を、テーマ別にご紹介。リニューアルにより、キーワードや描画材、技法などで検索できる機能も加わり、さらに使いやすくなりました。

詳しくは、本誌特集「『ART BY』を活用しよう!」をご覧ください。



拡大画像をみる

ヘキサポッドと北海道を眺めて
2022年制作
紙、絵の具、青森県/38×54cm/中学校

作者の言葉

ヘキサポッドの緑がかっているところや、立体感、さまざまなパーツが組み合わさった構成を絵の具で表現しました。また、海は青一色でなく、黄色や緑を入れて、反射光や影を表現しました。

各作品に「作者の言葉」を掲載。作品に込めた思いや制作意図をご覧いただけます。

生徒作品
ギャラリー ART BY

全国の魅力的な生徒作品を作者の言葉とともに紹介しています。授業で適宜ご活用ください。

うつくしい!
全国の中学生が撮影した写真を見てみよう

キーワード検索 キーワードを入力 検索
さらに条件を追加して検索 ▶

中学生の作品

- 身近なものを表す
- 自然物を表す
- 生き物を表す
- 人物を表す
- 風景を表す
- 想像して表す
- 素材を生かして表す
- 自己を表す
- 伝達のデザイン
- 装飾のデザイン・工芸
- 使うもののデザイン・工芸
- 写真で表す
- 動画をつくる

「ART BY」トップページ。風景画や自画像、ポスター、木工芸、写真など、さまざまな作品をテーマ別にご紹介しています。



光村図書LINE公式アカウント
友だち募集中!



※「QRコード」は、株式会社デンソーウェーブの登録商標です。
※「ルービックキューブ」は、株式会社メガハウスの登録商標です。

小・中・高等学校教科書訂正のお知らせ

教科書の訂正箇所をウェブサイトに掲載しております。まことに恐れ入りますが、ご確認のうえ、ご指導の際にはご留意くださいますようお願い申し上げます。



美術準備室 No.21

2022(令和4)年11月10日

発行人 ■ 吉田直樹
発行所 ■ 光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9 電話:03-3493-2111
www.mitsumura-tosho.co.jp
デザイン ■ Better Days(大久保裕文+深山貴世)
印刷所 ■ 梅田印刷株式会社

個人情報の取り扱いに関しては、弊社「個人情報保護方針」の通り、適切な管理・保護に努めてまいります。詳しくは、光村図書ウェブサイトをご覧ください。
教育情報誌に関するお問い合わせ先
住所変更・配送停止 ▶ ej1@mitsumura-tosho.co.jp
ご意見・ご感想 ▶ koho@mitsumura-tosho.co.jp

2022

美術準備室

つ く る ・ み る ・ 感 じ と る

第21号

光村図書

特集

「ART BY」を活用しよう!

アトリエ訪問

テキスタイルデザイナー

鈴木マサル



作家の肖像
美術家

篠田桃紅

放課後ART

- 愛知県瀬戸市立品野中学校
- 「大地の芸術祭」教育旅行プログラム

この1点

「記憶の固執」 中野信子

本誌は、文部科学省による「教科書採択の公正確保について」に基づき、(一般社団法人)教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」のによって配布しております。

アトリエ
訪 問

第 21 回

鈴木マサル

テキスタイルデザイナー

鮮やかな配色、インパクトのある大胆な構図、
愛らしいさまざまなモチーフ。鈴木マサルのデザインするテキスタイルは、
広げると空間がパッと華やぎ、見る人の気分を高揚させる。
暮らしを彩る独特のテキスタイルは、どのように生み出されるのだろう。
その創作の裏側を取材した。

撮影 永野雅子



渋谷駅前の喧噪を離れ、西に少し歩くと、風情豊かな街並みが広がった。渋谷区円山町。細い路地を抜け、緩やかな坂を上った先に、鈴木さんの仕事場はあった。内装は白で統一され、色鮮やかなテキスタイルのサンプルが映えていた。



手描きの下絵。
「デジタルでできる仕事が増えても、手描きのアナログ感を大切にしたい」。

——通りに面した大きな窓が気持ちいいですね。

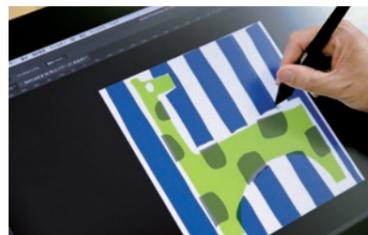
鈴木 改装に合わせて、無理を言って窓枠を木製にしてもらったんです。デザインを考えると、壁や窓を眺めながら空想することが多いので、落ち着いた雰囲気にしたくて。

ここに事務所を構えたのは、20年近く前。円山町はかつて花街だったので、昔は芸者さんが通りを歩いたり、料亭がにぎわっていたり、そういった光景を見かけることもありました。今は料亭がおしゃれなカフェになっていたりして、変化を感じられるところが気に入っています。——デジタル端末(ペンタブレット)が置いてありますね。

鈴木 今はデジタルと手描きの両方を行き来しながらデザインしています。筆で輪郭を描いてスキャンして、



雨でも気分が晴れやかなる色鮮やかな傘。



ペンタブレットを使った着色。よどみなく、すらすらとペンを滑らせていく。

着色はデジタルで、とかですね。筆のかすれやにじみなど、手描きでないと出せない質感はやはり多いです。

テキスタイルは、手仕事との親和性が高い分野だと思うんです。将来的には、すべての紙媒体がデジタルに置き換わるってことはあり得るかもしれませんが、50年後も100年後も、人はテキスタイルを着て、テキスタイルにくるまっているんじゃないかな。常に人とともにいる素材なので、手描きのアナログ感を大事にしたいという思いはあります。——下絵の段階から配色はイメージされているのでしょうか。

鈴木 最初から明度と彩度のイメージはありますね。テキスタイル製品はだいたい色違いも作るので、極端な言い方をしてしまえば、色が赤でも青でも、色相は何でもよかったりします。大事なのは、色の明るさと鮮やかさ。

僕は、色は「役割」だと思っています。気分を盛り上げたい製品を作るときは鮮やかで派手な色を使うし、リラックスしたい製品を作るときは落ち着いた淡い色を使う。それぞれに「役割」を与えてあげるような感覚で色をつけています。

——使うシーンによって、色を使い分けるんですね。

鈴木 ただ、もともと色を使うのは苦手だったんです。栗辻博^{あむつじひろし}(※1)先生

の事務所で働いていた頃、先輩たちが微妙な色合いの違いでどれを使うかの「色決め」をしているのに、僕にはすべて同じ色にしか見えなくて。それで危機感を抱いて、色を意識して勉強するようになりました。

栗辻先生によく言われたのは、色がきれいだと思った印刷物などを至る所に貼っておくこと。色感がいい人って、普段から美しい色を多く見ている人のことだと思います。そして可能なら液晶越しではなく、実際に対象を見たほうがいい。そのほうが得られる情報が何倍にもなります。——中学校教科書『美術1』(P.43)には「富山もよう」^(※2)を掲載しています。この作品に込めた思いを聞かせてください。

鈴木 これは「富山県民が富山の魅力を再発見する」というコンセプトで制作しました。実際に富山の名所を案内していただいて、モチーフごとに色のイメージを考えました。

当初は模様を印刷した新聞紙を配するという企画から始まり、その後、さまざまなグッズに展開されました。今も不定期で新しい模様を発表し続けているので、これからも楽しみにしていてください。

※1 栗辻博(1929-1995) テキスタイルデザイナー。鮮やかな色彩と大胆な構図で、日本のテキスタイルデザインの革新と発展に貢献した。

※2 「富山もよう」公式サイト <https://toyamamoyou.jp/>

「五十年後も
百年後も、人は
テキスタイルを着て、
くるまっつて
いるんじゃないかな。」



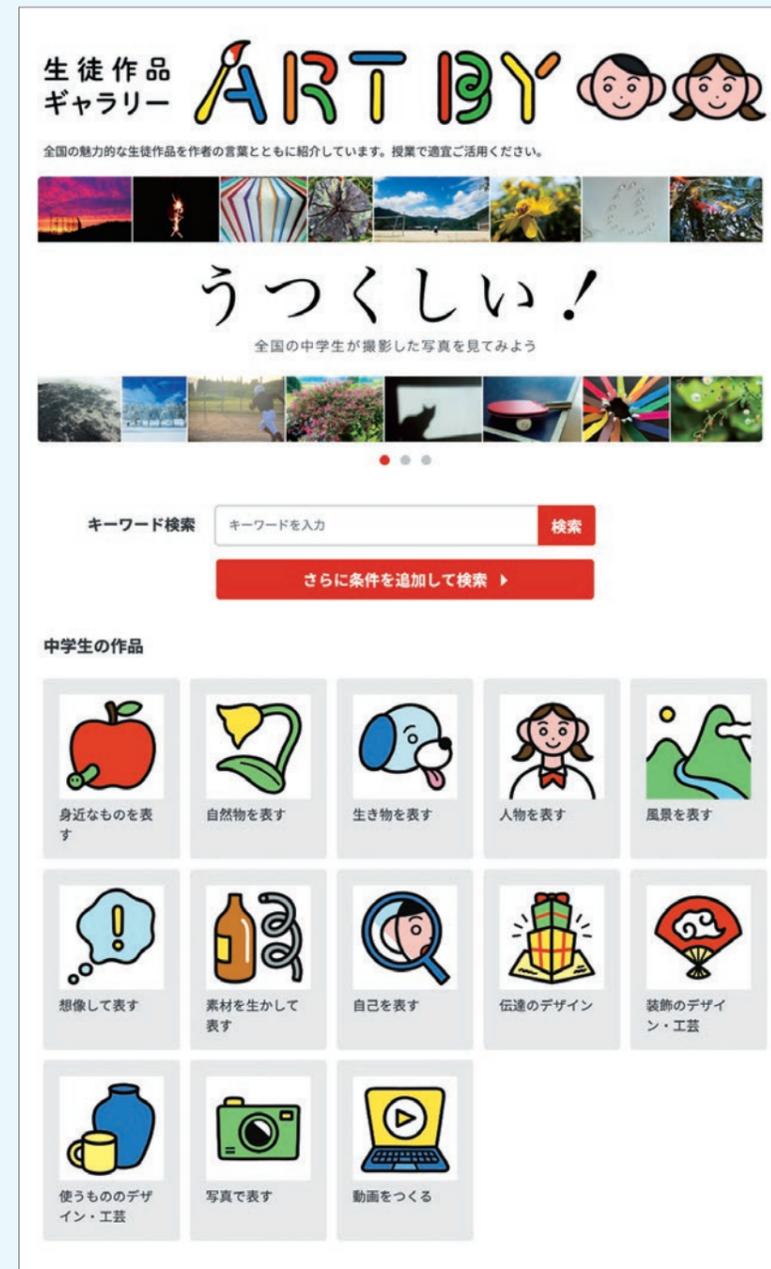
すずき・まさる
1968年千葉県生まれ。多摩美術大学染織デザイン科卒業後、栗辻博デザイン室に勤務。95年に独立し、2002年に有限会社ウンピアットを設立。04年からファブリックブランド「OTTAI PNU」を主宰。自身のブランドのほか、10年よりフィンランドの老舗ブランド「マリメッコ」のデザインを手がける。そのほか国内外のさまざまなメーカー、ブランドのプロジェクトに参画。東京造形大学造形学部デザイン学科教授。

「ART BY」を活用しよう!



「ART BY」は
こちらのQRコードから
アクセスできます。

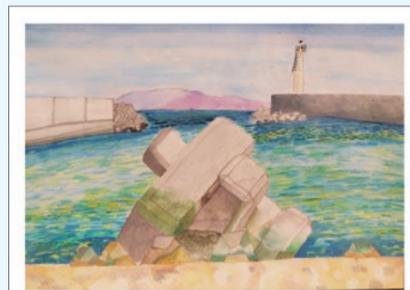
「生徒作品ギャラリー ART BY STUDENTS」(以下「ART BY」)は、全国の生徒作品を紹介しているウェブコンテンツです。2018年から光村図書ウェブサイトで公開しており、現在(2022年10月)、中学校・高等学校合わせて約1000点の生徒作品がアップされています。今年10月には、キーワードや描画材、技法などで検索できる機能も加わり、さらに使いやすくなりました。本特集では、**オンライン鼎談**や実践事例を通して、「ART BY」の魅力や活用方法をご紹介します。



「ART BY」トップページ(<https://artby.jp/>)

「ART BY」って?

全国の中高生の美術作品を閲覧できる国内最大級の生徒作品ギャラリー。風景画や自画像、ポスター、木工芸、写真など、さまざまな作品をテーマ別に紹介しています。



ヘキサポッドと北海道を眺めて
2022年制作
紙、絵の具、青森県/38×54cm/中学校

作者の言葉
ヘキサポッドの緑がかっているところや、立体感、さまざまなパーツが組み合わさった構成を絵の具で表現しました。また、海は青一色でなく、黄色や緑を入れて、反射光や影を表現しました。

各テーマのボタンをクリックしたり作品検索をかけたこと、さまざまな生徒作品を見ることができます。

「ART BY」で深まる 美術の授業

「ART BY」は、実際の授業でどのように活用されているのでしょうか。

学校現場で魅力的な実践をされている岩佐先生と田中先生、

そして大学で美術教育の研究をされている直江先生に、効果的な活用法などについて語っていただきました。

聞き手 光村図書出版 編集部



なほ え とし お
直江俊雄

筑波大学教授

愛知県生まれ。筑波大学芸術系教授。筑波大学卒業後、東京都内の公立中学校教諭を経て、筑波大学大学院修了。博士(芸術学)。ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ客員研究員などを経て、2014年より現職。美術科教育学会代表理事を務める。光村図書中学校・高等学校「美術」教科書の編集委員。



いわ さ
岩佐まゆみ

大分県立中津北高等学校 指導教諭

大分県生まれ。大分大学卒業後、大分県内の公立高等学校教諭などを経て2022年4月より現職。京都芸術大学大学院に在籍中。『高校生の美術1 学習書』(全国高等学校通信制教育研究会編)に携わる。光村図書高等学校「美術」教科書の編集委員。



た なか しん じ ろう
田中真二郎

秋田県大仙市立中仙中学校 教諭

秋田県生まれ。宮城教育大学大学院修了後、秋田県内の公立中学校などを経て2022年4月より現職。2012年に博報賞受賞。著書に『中学校美術サポートBOOKS 造形的な見方・考え方を働かせる 中学校美術題材&授業プラン36』(明治図書)。光村図書中学校「美術」教科書の編集委員。

鑑賞を深める「作者の言葉」

— GIGAスクール構想の推進により、1人1台の端末整備も進んだことで、授業でウェブコンテンツを活用する機会も増えてきました。先生方の学校では、「ART BY」をどのように活用されていますか。

岩佐 うちの学校では1人1台タブレット端末が配布されていますが、発想や構想を広げるツールとして「ART BY」を活用しています。作家の作品に比べ、同世代の作品だと身近に感じやすいので、よい刺激にもなっていると思います。私が指示しなくても、生徒たちが勝手に「ART BY」を見ているくらい。

自分では思いつかない発想が促される効果も実感しています。さまざまな描画材の作品がそろっているの、「ART BY」に載っている作品を見て、例えば「鉛筆だけで描いてみようかな」とか、そういったヒントを得られるコンテンツです。

田中 僕も重宝しています。これほどたくさんの生徒作品を掲載しているサイトは、他にないですから。

個人的には、中学校の「自己を表す」の категорияが気に入っています。自分をどんなふうに見えて表現しようとしているのかが見えて、生徒たちの多様性を感じます。

直江 先生方はこれまでも、過去に指導した生徒の作品を授業で紹介することはあったかと思いますが、

「ART BY」の登場で、さらに多様な作品を提示できるようになったのはたいへん意義深いと思います。

作品画像とともに「作者の言葉」を掲載しているのもいい。生徒によっては授業で設定された課題について言及しているものもあるので、その課題の中で生徒がどう試行錯誤したのかをイメージできますよね。

田中 どんな思いで描いたのか、自己をどんなふうに見えているのか、そういった制作へのアプローチが文章で見られるのはとてもありがたいですね。中学生の場合、まだ作品の鑑賞に慣れていない生徒も少なくないので、言葉があることによって、その作品に隠された作者の思いや工夫が可視化されるのは大きいです。

「作者の言葉」がいい。
 どのようにして
 試行錯誤して
 生まれた作品なのか、
 イメージできる。直江



花火を見ながら涼む夜
 2017年制作
 アクリル、木、針金、紙粘土、埼玉県/高さ26cm/中学校

作者の言葉
 シャワーを浴びてすっきりした後、髪の毛を乾かそうと扇風機の前で口を開いて風を受けました。その時、窓の外に豪華で美しい花火が咲き、「今、生きている」ことを実感しました。

POINT
 各作品に「作者の言葉」を掲載。生徒が作品に込めた思いや制作意図をご覧いただけます。

各生徒作品の詳細画面

直江 ただ、注意したいのは、必ずしも「作者の言葉」が正解ではないということですね。鑑賞においては、仮に作者が意図していないことだったとしても、見た人が自由に解釈していいものですから。

岩佐 そうですね。最初から「作者の言葉」を提示するのではなく、まず作品とタイトルだけを見せて、自分なりに作者の思いを想像したり、友達と感想を交流させたりして、最後に「作者の言葉」を開示するのもいいかもしれません。自分が感じたことと「作者の言葉」を比べて、同じように感じる部分があるか、もしくは新しい発見があるかななどを検証する。そうすることで、より深い鑑賞につながると思います。

世代もジャンルもさまざまな作品

岩佐 「ART BY」は中学生と高校生のどちらの作品も載っているのがいい。必ずしも中学生は中学生、高

校生は高校生の作品を見るのではなく、縦の行き来があってもいいと思います。

田中 確かに。高校生の作品が見られるのは、中学生としてはありがたいです。先輩の作品は憧れをもって見ますから。

岩佐 逆に、高校生が中学生の柔軟な発想に学ぶ、っていうこともありえますよね。また、授業時間内で制作した親しみのもてる作品から、美術部員が公募展に出すような作品まで幅広く掲載されているので、さまざまなニーズに応えられます。

直江 多種多様な作品に触れられるのは大きな魅力ですね。今後も次々に作品が蓄積されていくと、生徒作品のデータベース化が進んでいきますが、そうすると、制作年による時代的な違いが出てきてさらにおもしろいかもしれません。

岩佐 時代性は作品に反映されますからね。例えば、今はまだコロナ禍でマスク生活が続いていますが、あ

る学校では「マスクの中の自分らしさを表現する」という授業を行ったとか。まさに時代を象徴する題材ですよ。

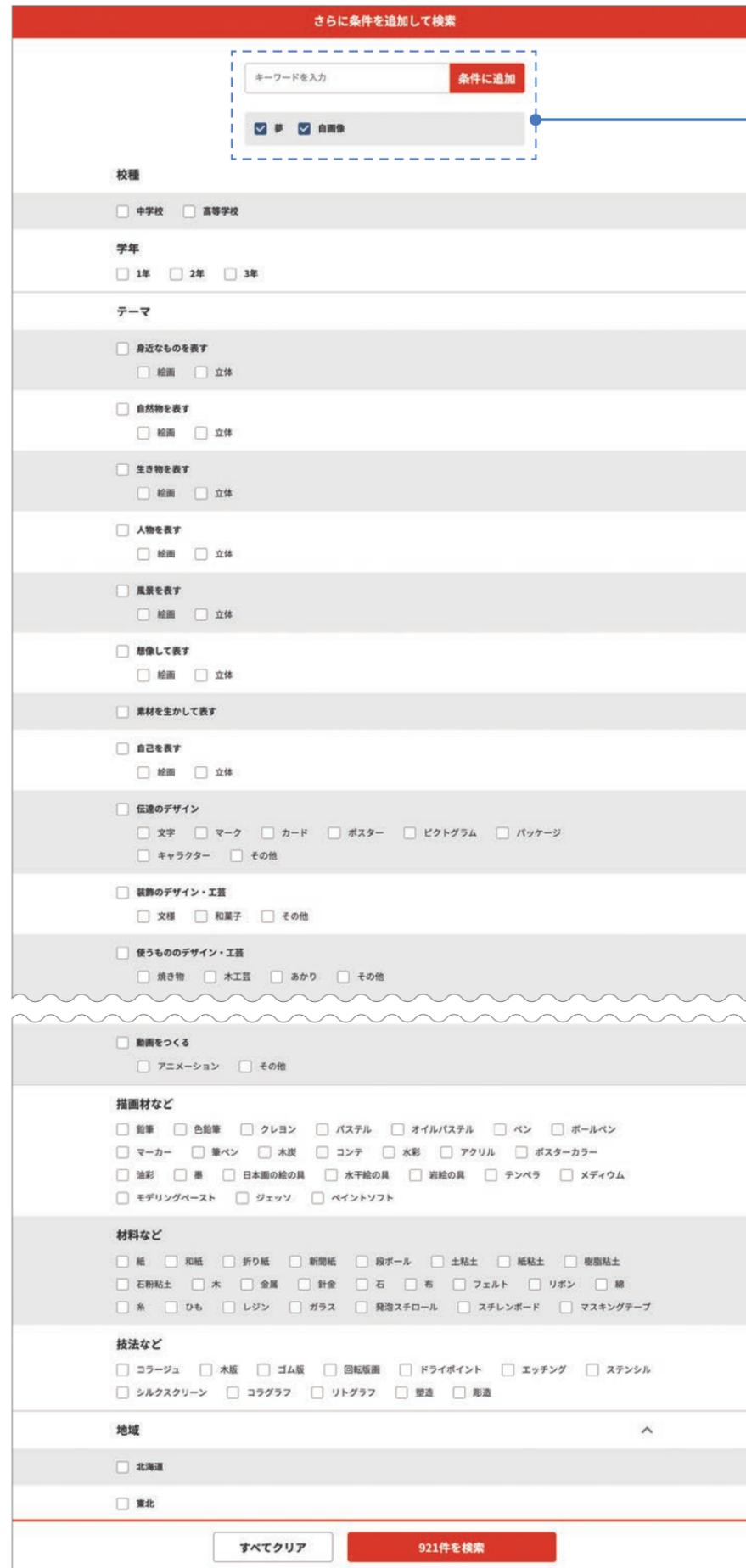
直江 アーカイブ化が進むと、美術教育史的にも、より価値あるコンテンツになっていきますね。特別支援学級や海外の生徒たちの作品も増えてくると、さらに内容が豊かになります。

田中 楽しみですね。作品を提供した生徒にとっても、自分の作品がこうしてウェブ上で公開されて、ずっと記録として残り続けるのはうれしいことだと思います。

検索機能でさらに便利に

— 今回のリニューアルで、キーワードや描画材などで作品を検索できるようになりました。この検索機能を使って、どんなふうには生徒に作品を紹介したいと思われませんか。

田中 僕だったら「キーワード検索」を使うかな。例えば「夢」でキーワ



POINT
 キーワード検索が可能になりました。タイトルや「作者の言葉」からキーワードを抽出します。

POINT
 作品を「校種」「学年」「テーマ」「描画材」「材料」「技法」「制作された地域」で絞り込み検索ができるようになりました。

幅広い作品が掲載されているから、さまざまなニーズに応えられる。岩佐



詳細検索画面

ード検索して、タイトルや「作者の言葉」に「夢」が入っている作品を探すと。作品の主題となるキーワードで検索するパターンが頻繁に使われるような気がしますね。

描画材や材料で作品を検索するのもいいですね。「針金」にチェックを入れて検索する、とか。一つの材料でこんなにさまざまな表現ができるんだとか、そういった見せ方はできると思います。

岩佐 私も「キーワード検索」はかなり有効だと思います。例えば「自分の感情を表現する」という課題設定の場合、その感情をあらわすキーワードを生徒が自主的に検索することで、発想や構想を広げることができますよね。

先生が授業を振り返るきっかけにも

田中 長年授業をしていると、どうしても自分の指導が凝り固まってきて、同じような表現方法や描画材で制作してしまうことってあると思うんです。そういったときに「ART BY」を見ることで、「こういう方法を試させてもおもしろいかも」と、自分の指導を振り返るきっかけにもなるのではないのでしょうか。

生徒が見ることはもちろん、先生方にとっても「ART BY」を活用することは、授業づくりを考えるヒントになると思います。

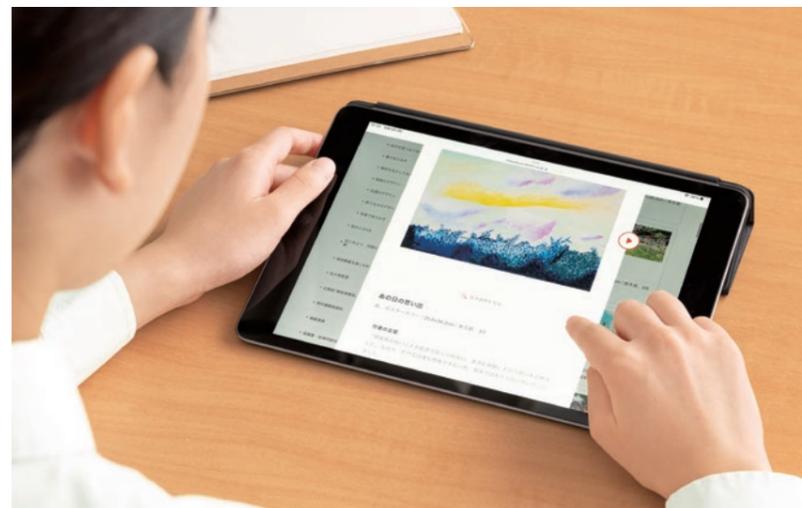
岩佐 研究会を振り返っても、同じ地域だと、ある程度授業の内容が似てしまうことは確かにありますよね。全国各地の多彩な作品を集めた「ART BY」は、先生方にとってもよい研究材料になるはずですよ。

— 今後は「ART BY」を活用した学習指導案もサイトにアップしていく予定です。こちらも授業研究にぜひお役立てください。

模倣ではなく 主題を生み出すヒントに

直江 お二人にお伺いしたいのですが、たくさんの作品が見られることで、生徒が安易に模倣してしまうという懸念はないのでしょうか。他人のアイデアなのに、自分のアイデアのように表現してしまう、とか。

岩佐 私は授業で参考作品を見せる際は、必ず著作権の話をするようにしています。「真似してみたい」という意欲をもつこと自体は悪くないけど、それを「自分の作品です」と言って発表してしまうのは剽窃にあたるので駄目、と。



先生にとっても、自分の授業づくりを考えるきっかけになる。田中



田中 中学校の場合、自分の中からどのように主題を創出させるかという部分をすごく意識して授業を行っているので、少なくともうちの学校の場合、ビジュアルだけを安易に真似する生徒はそう出ないと思います。「作者の言葉」なども参考にしながら、主題を生み出すヒントにしてくれればいいですね。

直江 「ART BY」に限らずですが、他の作品を参考にした際、その作品のどこに影響を受けて、どの部分を自分なりに作品に取り入れたのかといった発想のプロセスを残しておくことが重要になりますね。

作家の作品でも、何らかの形で先行作品の影響を受けているケースは多いですし、見た目だけを真似するのではなく、過程を重視した創作に役立てるといいですね。「ART BY」の活用で、美術教育がさらに発展していくことを期待しています。(了)

先生方が選んだ「ART BY」のお気に入りの生徒作品 /

「私のこの1点」



何度でも見ていられる心の庭園

超絶技巧と驚きの連続といった作品があふれている「ART BY」の中で、「映像をつくる」のリストの最初に載っているこの映像に戻ってくると、ただ心がいやされて何度でも見ていられます。ありふれた庭の片隅と思われる草花を背景に、素朴な線で描かれた少女がこちらを見つめているだけ。目を閉じる人物と庭の中に立つ人物の表現スタイルがなぜ違うのか、これらが何を表しているのか謎ですが、そんなことを考えずにただイラストの少女とともに心を揺らしているのが心地よいです。



身近な夢
映像作品 / 1分30秒(再生時間)
青森県、高校2年

作者の言葉

映像作品をつくってみたいと思い、現実の映像とアニメーションを組み合わせたらどうなるか挑戦しました。かわいさもあつつ不思議な雰囲気の作品ができたと思います。



独特の世界観で描かれた物語絵

画面に描かれている人物は少女一人だけで、他に人の姿は見当たりません。世界にこぼれ落ちた一瞬のきらめきは、三日月や星、十字架、宝石、植物や魚、遺伝子のらせん構造のような模様となって、ひらめく布の模様に染め上げられていきます。その様子はまるで天地創造のようで、少女が共に生きていく仲間をつくり出そうとしているようにも見えます。独特の世界観を大切にしている、絵本の挿し絵のような作品だと思いました。



染まれ 油彩 / 80.3×100cm / 神奈川県、高校2年

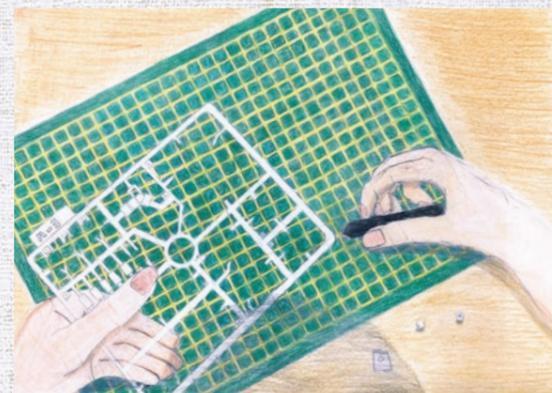
作者の言葉

あるとき世界にこぼれ落ちた瞬間のきらめきを布を染め上げる様子を描きました。なぜ少女は色を捕まえようとしたのでしょうか。描かれたさまざまなモチーフをヒントに、あなただけのストーリーを考えてみてください。



自分の視点から描く「自分」

「自己を表す」に掲載されている作品のほとんどは客観的に自分を見ているようなものですが、この作品は、自分の視点から描いています。それも、プラモデルを作っている最中のものです。今しか表現できない、今だからこそ表現できる作品というものに力を感じますし、宝物のように思います。何気ない瞬間を自分に重ねているおもしろさ、工作マットの線とプラモデルの線の重なりのおもしろさ、とても魅力的な作品です。



作りかけの夢 鉛筆、色鉛筆 / 27×38cm / 埼玉県、中学2年

作者の言葉

僕にはたくさんさんの夢があります。その夢に向かつて努力している日々が、こつこつこつと地道に作りあげるプラモデルに似ていることに気がつき、プラモデルを作りあげている様子を自画像として描きました。

わたしの授業プラン

さまざまな実践をされている岩佐先生と田中先生に、「ART BY」を活用したとっておきの授業プランをご紹介します。

身近な「大切なもの」を描く

(高校1年)

全6時間／絵画・彫刻



I W A S A

題材のねらい

身近な「大切なもの」をモチーフに選ぶことで、見たままを描くだけでなく、生徒の思いを創意工夫して表現できると考えた題材です。どんな工夫をしてよいかわからない生徒には、「ART BY」の作品を見て、発想や構想のヒントにでもあります。第6時の鑑賞会で、形や色、構成、描画材の特徴や筆づかいなどに表現した大切な思いや創意工夫を友達を感じ取ってくれと、生徒たちはとても嬉しそうに、美術表現のすごさを実感します。

準備するもの

教師：端末、画用紙(B5判程度)、さまざまな描画材や材料
 生徒：端末、自分の表現に合わせた画材

時	学習活動
1	身近にあるものを見つめ直す <ul style="list-style-type: none"> 日々の生活の中で目にするものの中から、絵に描きたい「大切なもの」を選ぶ。 「ART BY」の「身近なものを表す」の作品を鑑賞し、同じ高校生が表現した作品の創意工夫を感じとる。
2	発想し、構想を練る <ul style="list-style-type: none"> 選んだ「大切なもの」に対する自分の考えや感情をクラゲチャートに書き出す。それをもとにどのような表現の工夫ができるか発想し、作品の構想を練る。
3~5	制作する <ul style="list-style-type: none"> 構想に合わせて描画材を工夫し、イメージに合わせて制作する。 1時間ごとに振り返りを行い、次の目標を設定する。
6	鑑賞会を行う <ul style="list-style-type: none"> 友達の作品を鑑賞し、表現の工夫から意図や心情について推測し、感想を述べ合う。 意見が出尽くしたら、制作者が作品の意図を解説し、振り返りする。

15歳の存在証明

(中学3年)

全8時間／絵や彫刻など



T A N A K A

題材のねらい

小学校の図画工作と中学校の美術で学んできたことの集大成として位置づけている題材です。これまでの学習を生かして、「15歳の今しかできない表現」を考えて制作させます。授業の導入では「ART BY」の生徒作品をグループで鑑賞します。多様な生徒作品を鑑賞することで、「自分ならどう表現するか」を考えさせたいと思います。

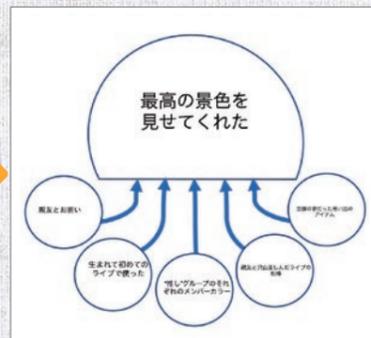
準備するもの

教師：端末、さまざまな描画材や材料
 生徒：端末、自分の表現に必要な描画材、材料

時	学習活動
1	「表現すること」とは何か考える <ul style="list-style-type: none"> 幼少期の子どもの絵を鑑賞し、発達段階による絵の変化について学ぶ。 現代美術やアール・ブリュットなどの作品を鑑賞し、レポートを書く。 レポートを教室や廊下などに掲示し、共有する。また、「表現すること」とは何かについてみんなで話し合う。
2	「ART BY」の「自己を表す」の生徒作品を鑑賞して発想を広げる <ul style="list-style-type: none"> 各自の端末で「ART BY」の「自己を表す」の生徒作品を鑑賞する。「共感!」「驚き!」「気になる!」という三つの視点で3作品を選ぶ。 選んだ理由をワークシートに書き込み、グループで発表し合う。この鑑賞活動の中で出たキーワードや話題になったことをクラス全体で共有する。 自分ならどのような主題を表現するか、どのような表現方法を試してみるか考える。
3~7	構想を練って制作する <ul style="list-style-type: none"> マッピングなどの思考ツールで自分を分析したり、画集や「ART BY」などを参考にしたりして、作品の構想を練る。 描画材や材料を工夫し、それぞれの表現方法で制作する。1時間ごとに学習課題を設定し、制作中に気づいたことや作品の変化などを端末に記録する。
8	鑑賞する <ul style="list-style-type: none"> 自分の制作意図を発表する。また、友達がどのような思いで制作したのかも知る。 卒業制作展に展示するため、制作意図などを作品解説としてまとめる。



「ART BY」の「身近なものを表す」に掲載されている生徒作品を鑑賞して、表現の工夫などを参考にします。



親友と初めて行った「推し」のライブで使用した双眼鏡を描くことに。クラゲチャートを使い、双眼鏡への思いをつきつめて考えた。

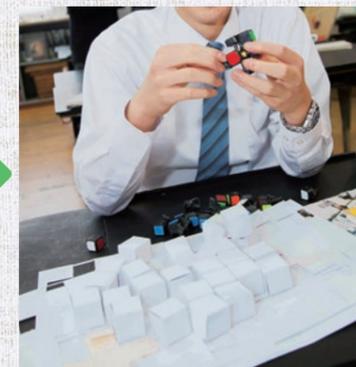
生徒作品



【完成作品】想眼鏡(そうがinkyō)
 背景とレンズの部分は「ずっと目に焼きついている最高の景色」を表現するため、アクリル絵の具やポスターカラーで色鮮やかに描いた。



「ART BY」の「自己を表す」の生徒作品を、「作者の言葉」も参考にしながらグループで鑑賞した。



大好きなルービックキューブで自分自身を表すことに。丁寧に一つ一つのパーツを制作。

生徒作品



【完成作品】人生キューブ
 ルービックキューブの各面に、好きなものと苦手なもののイメージを対になるように貼って構成した。

作家の肖像

第 21 回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。



撮影：佐藤大作
提供：公益財団法人岐阜現代美術財団

1913-2021
篠田桃紅

しのだ・とうこう

1913年中国・大連市生まれ。美術家。5歳から家庭で書の手ほどきを受け、その後は独学で書を習得。墨を用いた抽象表現という新たな芸術を切り開き、注目を集める。56年に単身渡米し、各地のギャラリーで個展を開催。58年に帰国後も、レリーフや壁画などの建築物に関わる大作を手がける一方、版画や題字、随筆など、多岐にわたって活動した。2021年3月、107歳で死去。

空間と共鳴する作品

あのときの感動は、今も鮮明に覚えています。2003年、まだ東京都品川区にあった原美術館で開かれた、桃紅さんの90歳記念展でのこと。私は初日に伺ったのですが、作品の置かれた空間全体から、心地よい「震動」を感じました。作品が周囲の空間に溶け込み、共鳴し、響き合っている、そんな感覚でした。

作品が単体でもつ意味がどうか、そういった狭い範囲の芸術で捉えられること以上に、作品が置かれたとき、その作品が周囲の環境とどのように対話するかというところに、桃紅さんの創作の意味はあったのだと思います。まさに、空間ごと鑑賞する作品でした。

凛とした立ち姿

その個展で初めて桃紅さんとお話しする機会にも恵まれました。今思えばたいへん失礼なこと——冗談交じりに、桃紅さんの青春時代に関することを伺ったのです。結局何ともお答えにならなかったのですが、少し頬を赤らめながら、非常にきれいな笑みを浮かべてらっしゃった。「ああ、やばなことをきいてしまった」とすぐに反省したのですが、どこかそういう質問を投げたくなるような、人としての魅力にあふれた方でした。

また、2016年に当館で近代建築に関する企画展(※1)を開催した際、桃紅さんに題字をお願いし、ご本人にもオープニングイベントにご参加いただきました。車いすでいらっしゃったのですが、来場者の待つ会場へ向かう段になると、ずっと車いすから立って歩いていかれたのを覚えて

います。「篠田桃紅」としての矜持(きやうじ)でしょう。凛としたその立ち姿は、たいへんに美しく見えました。

1本の線に宿るもの

潔く引かれた流麗な線は、ためらいなく一気に描かれたように見えて、実はどこかで滞っているのではないかと。桃紅さんの作品は、私にそんな予感を抱かせます。もちろん、達人の域に達している方ですから、作品からはそんなことは垣間見えません。ただ、さまざまな感情に自分をせき止められながらも進んだ線が、結果として、私たちの目には明快な線に見えているだけではないか。そんなふうを感じるのです。

その生き様から「孤高」と表現されることも少なくない桃紅さんですが、決して独りよがりな方だったわけではありません。筆を握り続けた107年の生涯で得た、さまざまな方との出会いや無数の体験の蓄積が、1本の線に宿っているのだと思います。ご自身の作品と同じです。社会という空間の中で、どのように周囲と共鳴し、どう在るか。そういったスケールの大きい考えをもった方でした。(談)

※1「竹中工務店 400年の夢 一時をきざむ建築の文化史—」(2016.4.23-6.19)

酒井 忠康

さかい・ただやす
世田谷美術館館長、美術評論家。
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
光村図書中学校『美術』代表著者。



左／「おもい」

和紙 墨、銀泥 129×60cm 2001年
公益財団法人岐阜現代美術財団蔵
晩年は余分な要素が削ぎ落とされ、1本の線の存在感が際立つように。余白の重要性も増し、画面がより洗練されていった。

右上／「うぶ」

キャンヴァス 墨、銀泥、胡粉、銀地 175×103cm 1994年
公益財団法人岐阜現代美術財団蔵
90年代以降は金や銀が多用されるようになり、本作のように金地や銀地を背景にし、墨色を際立たせた幽玄な作品も数多く発表した。



右下／企画展「竹中工務店 四百年の夢」のチラシ

2016年 画像提供：世田谷美術館
世田谷美術館で開催された企画展。題字を篠田が描いた。

美術部へようこそ! ● 愛知県瀬戸市立品野中学校

地元の特徴を生かした作品づくりに取り組み、地域との交流を大切にしている美術部取材しました。

日常的に作陶に励む

粘土の塊が、みるみる壺の形になっていく。睨みを利かせる壺、ほほえむ壺、眠たそうな壺——。顔の模様を施した大きな壺は、どれも個性たっぷり。しかし、その壺に向き合う部員の表情は、みな一様に真剣そのものだ。

瀬戸市立品野中学校の美術窯業部は、週前半はポスターや看板制作といった活動を行い、週後半は校内にある「窯業室」で作陶に励んでいる。校舎一階角にある窯業室には、ろくろや釉薬、土練り機のほか、焼成する窯まで置かれ、焼き物づくりに関するほぼすべての工程を校内で行える設備が整う。

また、同校ではPTAが「つくろう会」を組織しており、焼き物づくりを楽しむほか、美術窯業部の活動を後押ししている。

「せともの祭」で販売も

瀬戸市は、1000年以上の歴史をもつ、日本屈指の窯業地。「日本六古窯」(※)にも数えられ、陶磁器の代名詞でもある「せともの」という言葉は、同市の地名に由来する。陶土が豊富に産出されることから窯業が発展し、今も市内には、窯元や製陶メーカーが軒を連ねる。

そんな瀬戸が最もにぎわうのが、毎年9月に開かれる「せともの祭」だ。市中心部に問屋や窯元など約200軒が出店し、陶磁器を販売する。同校の美術窯業部は毎年、同祭の「道の駅瀬戸しなの会場」にブースを出展し、部員自ら店頭に立って手作りの置物や鉢などを販売している。



「美術は相手があってのもの。多くの方に見ていただき、自分の作品が認められることは、子どもたちにとってすごく貴重な経験になる」と話すのは、顧問の清水智徳先生。金銭のやり取りが生まれることで責任感も増し、制作にも力が入る。売り上げは陶土や釉薬の購入に充てられ、来年に向けての制作活動につなげている。

うまさより、心を込めて

現在の部員は20人程度。基本的に、土練りや施釉、焼成といった作業は先生が行い、部員たちは成形や絵付けを中心に行っている。作業中は心地よい緊張感に包まれつつも、時折部員どうしで相談しながら制作を進めるなど、明るい雰囲気だ。部長の高島瑠華さんは、「学年を超えて仲が良く、みんな個性的なので作品を



見ていて楽しい」と語る。

基礎的な技術の習得はもちろん大切だが、清水先生が重視するのは「小手先のうまさではなく、心を込めて、見る人の目線になってものを作る」こと。その経験は、今後も必ず生じることだろう。

※中世から現在まで生産が続く、国内で代表的な六つの陶磁器生産地(越前・瀬戸・常滑・信楽・丹波・備前)の総称

左/手にしている高さ30~40cmの壺には、「黄瀬戸」や「志野」といった瀬戸の伝統的な釉薬が掛けられている。焼成室には、ガス窯1基と電気窯2基がある。



上・左下/壺に模様を施すときの表情は、真剣そのもの。



窯業室の隅に置かれているさまざまな釉薬。

教室を飛びだして

「大地の芸術祭」教育旅行プログラム

新潟県越後妻有地域を舞台に、2000年から続く「大地の芸術祭」。その豊かな資源を活用した「教育旅行プログラム」を紹介します。



新潟県十日町市と津南町を舞台に開かれる国際芸術祭「大地の芸術祭」

では、アートを通じた地域づくりなどについて学ぶ「教育旅行プログラム」を展開している。小中高の修学旅行や「総合的な学習の時間」などで活用されており、2021年度は全国から約70校が訪れた。

窓口は同祭を共催する「NPO法人越後妻有里山協働機構」。同祭は通年で約200点もの作品を常設しており、毎年教育旅行を受け入れてきた。

取り組みが始まったのは2020年。当初は、新型コロナウイルスの影響で県外旅行が難しくなった地元の学校に向けて、「これを機に地元の魅力を再発見してもらいたい」という思いでスタートした。その後、徐々に県外の学校からの問い合わせも増

えてきたという。

2022年4月、同祭の開幕に合わせて、教育旅行の受け入れも本格化。7月8日には、十日町市の中学1年生49人が「ふるさと学習」の一環で会場を訪れた。

会場の一つ「まつだい農舞台」では、生徒たちは青々と茂った棚田を歩きながら、野外に点在する作品を順番に鑑賞。地域ボランティアのガイドを聞きながら、タブレット端末で写真を撮ったり、体験型の作品を五感で感じたりと、和気あいあいと作品巡りを楽しんでいた。

同NPOの佐藤あゆさんは、「作品を単体で鑑賞するだけでなく、里山の風景や自然も含めて体感してもらうことで、文化の豊かさを深く感じてもらえたら」と話している。



野外に展示された作品を鑑賞し、タブレット端末で撮影する生徒たち。
※作品は「リバース・シティ」パスカール・マルティン・タイユール

放課後
第21回
ART



第 21 回

記憶の固執

サルヴァドール・ダリ

キャンヴァス、油彩 24.1×33cm 1931年
ニューヨーク近代美術館蔵（アメリカ）

© Salvador Dalí, Fundació Gala-Salvador Dalí, JASPAR Tokyo, 2022 G2919

※中学校教科書「美術2・3」P.17に掲載

「時間」への疑義

サルヴァドール・ダリの本作はカマンベールチーズのイメージや性的な不安、フロイトからの影響など多くの分析が既になされているが、本稿では時計のモチーフから時間知覚についての思索の反映という側面を考察したい。

古典をさかのぼるまでもなく、時間の進行についてはしばしば芸術的、文学的、哲学的な興味の対象とされてきた。

時間は、五感で知覚することができない。機能的磁気共鳴画像法(fMRI)が広く使われ始めてから約20年が経過した現在、脳の局所的な活動についてはかなりの部分が解明されてきていると言ってよい。しかしながら、時間感覚を司る脳機能領域については、局所的な機構が発見されていない。

つまり、時間知覚は、局所的な活動ではなく、脳全体の機能が統合されて生じる感覚である。異論も提示されているが、概ね従来の物理学では、時間は一定の速度で線形に進むことが多くの場合のコンセンサスであった。

一方、脳における局所的な活動がネットワーク的に連携して機能することで生成されるのが時間知覚であ

るとすると、時間が一定の速度で進むことを前提とするのは、むしろ人間としての本来的なあり方を歪めるものになりかねない。換言すれば、一般的に広く流通している時計機構が示す時刻は、時間が線形に一定の速度で進むことを前提としており、日常生活もこれに依拠して構築せざるを得ないが、心理学的、生理学的な影響を鋭敏に反映して、人間が知覚する時間の速度自体は常に変化し続けている。

時間知覚が脳における生命維持活動と密接に関連しており、さまざまな認知活動の基礎としても大きな働きをもっていることを考慮すると、近年とみに話題になることの多い睡眠障害(ある調査によれば睡眠に問題を抱える人は約50%に上るといえる)は、我々本来の時間を強制的に容容させられていることによって惹起されているともいえる。

時間知覚は、精神疾患に見られる認知異常との関連も示唆される。問題提起を芸術の機能と評価するならば、本作は極めて重要かつ興味深いテーマを提供している。また、先端的な物理学が提示する時間の存在への異論、同時性のその存在自体への疑義として、世界の本質に対する私たちの興味を刺激してくる作品でもある。

中野信子
なかの・のぶこ

1975年東京都生まれ。
脳科学者、東日本国際大学教授。
東京大学工学部卒業、同大学院医学系研究科
脳神経医学専攻博士課程修了。
2008年から2010年まで、フランス国立研究所
ニューロスピン(高磁場MRI研究センター)に勤務。
『サイコパス』(文藝春秋)、『脳内麻薬』(幻冬舎)
など著書多数。脳や心理学をテーマに
研究や執筆活動を精力的に行っている。